「みそかに」は、何故消滅したか

関　一雄

はじめに――「ヒソカニ」は、日常的用語

「ヒソカニ」と「みそかに」は、漢文訓読語と和文語の対立という文体差・位相差として捉えられるのが、今なお一般的で、意味の面からの検討が余りなされていない、というのが学界の現状であると思われる。私は、旧稿で『土左日記』の「ヒソカニ」を採り上げ、その4例がいずれも「言ふ」の修飾語であって、2例は〔小声デ〕の意であるのに対し、他の2例は〔内密ニ〕の意である、と考えた。[1] これは、「ヒソカニ」が漢文訓読語（漢文訓読によって生じた日本語・漢文訓読に専ら用いられる語）であるとする観点から離れ、「ひそむ」「ひそまる」など、同源の語の存在からしても、古く漢文訓読が行われる以前から日本語に存した「日常的用語」[2]であるとする考え方に立って論じたものである。

しかし、それなら何故、『土左日記』以外の和文に「ヒソカニ」が用いられないのか、このことについても、一部旧稿でも述べたが、本稿は、その補足・補訂をすることと、「みそかに」が中世に入ると、一部の説話文学には用いられるものの、中世以降のいわゆる和漢混淆文などの作品では用いられず、「ヒソカニ」が用いられて現代語に至っていることについて、私見を述べるものである。

一、『うつほ物語』の「みそかに」と「みそかなる」――「みそかに」は、物語用語

平安時代の和文の「みそかに」の大部分は〔内密ニ〕の意で解され、修飾する語（句）は、多岐にわたる。[3]

しかし、『うつほ物語』の「みそかに」の例の中には〔小声デ〕〔小サイ音デ〕の意でも解されるものが数例見え、しかも「ヒソカニ」の例も1例であるが用いられている。

●后の宮の御匣殿、異御腹のいもうとなれど、いとらうたくして顧み給ふを、かくきこしめして、（御匣殿）「さればこそひ

そかに『渡り給ひね』とはものせしか」とて、別納に渡したてまつりつ。（蔵びらき下）

右の引用は「角川文庫」（原田芳起校注）によったが、前田家本を始め、殆どの写本・板本が「ヒソカニ」とあるようである。ここで、「角川」によったのは、「ヒソカニ」の直後を二重の引用符にすると、「ヒソカニ」は「いふ」「つたふ」を意味すると思われる「ものす」を修飾することになり、『土左日記』の用法に通ずるとみられる校訂がなされていることによる。

「みそかに」の例の中で、〔小声デ〕〔小サイ音デ〕と解される例は次のものである。（以下の引用は、「新編日本古典文学全集」による。）

1. 東面の格子一間あげて、琴をみそかに弾く人あり。立ち寄り給へば入りぬ。（俊蔭①五二ペ）

2. （帝）「てづから点し、読みて聞かせよ」とのたまへば、古文書机の上にて読む。例の花の宴などの講師のこゑよりは少しみそかに読ませ給ふ。（蔵開中②四五〇ペ）

3. 御簾のもとに后の宮のおはせば、上は大将に御目くばせて、みそかに読ませ給ふ。（蔵開中②四七五ペ）

4. おとど「いま、いぬに琴習はさむ時に、さらばうらやまむかし」など、みそかにのたまふ。（国譲上③七八ペ）

5. だいとこたち近う候へど、加持高うもせさせ給はず。「弱き人は、それにまどひ給ふ物ぞ」とて、みそかによませ給ふ。（国譲下③三七九ペ）

1. は、若小君が俊蔭娘の琴を弾く部屋の近くに立ち寄ると、俊蔭娘は奥へ入ってしまう、というのであるから、この例には〔内密ニ〕の意も含まれているとも見られよう。2. は、仲忠が、先祖の遺文を帝の前で読み上げる場面であるが、「みそかに」は、殿上の間にいる人々に、聞かせない、という意味で〔内密ニ〕も含まれていると言える。3. は、俊蔭の集を仲忠が帝に講じていたところに后の宮が来た、という場面で、〔小声デ〕の意ではあるが、〔内密ニ〕とも解せなくもない。4. は、正頼が妻の大宮に対して、あて宮のことで種々心配事を話し合う場面で〔小声デ〕の意とも〔内密ニ〕ともとれる。5. は、女一の宮の難産の場面で、仲忠の命令で加持を〔小声デ〕する例で、これには〔内密ニ〕の意はない。

このように、1.～5. の例は一応〔小声デ〕と解されるのであるが、5. 以外は〔内密ニ〕の意も含むか、〔内密ニ〕とも解されるというものである。

ところで、この作品にも「みそか」を複合語の前項にした用例や「みそかなる」という用法が見られる。

◎宮の君、「など。おのれはみそか男し、人と文通はしやはする。さする人をこそは、よきにはしたまふめれ」。宰相、「かかるをぞのたまふぞかし。誰かみそかなるわざする。疎からぬ御仲にこそ。かくなのたまひそ」。（国譲中③一六三ペ）

一方、訓点資料には「みそかに」の用例は、見つかりにくいようだが、ミソカヌスビト〔竊盗〕（類聚名義抄〈観智院本・鎮国守国神社本〉）のような「ミソカ」は、大唐西域記長寛元年点（中田祝夫『古点本の国語学的研究訳文篇』五五九ペ）の「ミソカネ」（矯嬌の左にカナで付訓）の「ミソカ」と同じで、訓点資料と和文に共通しているものである。

『うつほ物語』で興味深いのは、次のような「しのびやかに」（7例）が、この物語の最終の巻である「楼の上」に集中して用いられていることである。

(1)中納言、しのびやかに、「（略）」とのたまへば、
（楼の上上 ③四四〇ペ）

(2)（仲忠）「まかでさせむ」とのたまへば、（あて宮）「あやしのことや」とて、しのびやかに笑ひたまふけしきも聞こゆ。
（楼の上上 ③四四一ペ）

(3)しのびやかに聞こえたまふやう、（仲忠）「（略）」。
（楼の上上 ③四四九ペ）

(4)四日の夜、夜中ばかりに宮帰りたまふ。しのびやかにて、さるべき四位六人ばかり、五位十人ばかりして、大将、いとおぼつかなく覚えたまひけれど、よろづに聞こえ慰めたてまつりたまひて、暁に帰りたまひぬ。
（楼の上上 ③四九八ペ）

(5)（俊蔭娘ハ）臥したまへれど、いとどしう聞きつけたまひて、涙こぼれたまふこと限りなし。臥しながら、琴に、しのびやかに、（俊蔭娘ノ歌）「（略）」
（楼の上下 ③五二七ペ）

(6)（涼）「帝よりや」と、しのびやかに聞こえたまへば、
（楼の上下 ③五三四ペ）

(7)いとうたておどろおどろしかりければ、ただ緒一筋をしのびやかに弾きたまふに、にはかに池の水湛へて、遣水より、深さ二寸ばかり、水流れ出でぬ。
（楼の上下 ③六〇三ペ）

「しのびやかに」は、〔声ヲヒソメテ〕〔音ヲカスカニシテ〕の意ととれるが、(4)の例が外れるようでもある。しかし、この例も宮（女一の宮）が、夜中・暁に帰る場面の描写であるので〔声・音ヲ立テナイヨウニ〕の意であると解すれば、7例に共通する意味が認められるのである。

ところで、「楼の上」には、「みそかに」が1例用いられている。

◎（いぬ宮→女一の宮）「いかがは。琴の弾かまほしければ。念じてやはおはせむずる。みそかにはおはせかし。（略）」
（楼の上上 ③四八二ペ）

この「みそかに」は、〔内密ニ〕の意であり、「しのびやかに」との意味の使い分けがなされていることが明確である。

思うに、物語の登場人物の動作や状態を詳しく限定する副詞又は形容詞・形容動詞の連用法は、物語の盛行とともに発達し、「ヒソカニ」「みそかに」で表現されていた時期から「しのびやか

に」「しのびて」等を加えて、意味分担を行うようになっていったことを、「楼の上」の事例が示唆しているのであろう。

いわゆる和文語の「みそかに」は、〔内密〕〔秘密〕の意を表す「みそか」と貴族階級の日常的用語であった「ヒソカニ」の一種の混淆（類推）から生じて物語（文学）用語として定着していったものであろう。

二、『三宝絵（詞）』の「ヒソカニ」と「みそかに」
――名古屋市博物館本の両語の意味差

「みそかに」が、「みそか」「みそかなる」から、類推で作られた物語の用語であることは、この作品において、草仮名文の名古屋市博物館本の「みそかに」の用法から言えそうである。

以下、東寺観智院本の漢字片仮名交じり文の引用は、「新 日本古典文学大系」から、名古屋市博物館本は、春日和男『説話の語文』（一九七五年）の「Ⅱ 三宝絵詞東大寺切の研究」から引用する。ただし、後者は、特殊な草仮名書体を原漢字体で、表意文字としての漢字母等を漢字の太字体を用いるなどの、原本を精密に再現するための工夫を凝らした翻刻がなされているが、本稿では、特殊な草仮名書体は普通の平仮名書体ものと合わせ、現行の平仮名字体に改め、更に句読点・引用符等も付して引用する。（ローマ小文字のものが、東寺本。その対応本文にダッシュを付したものが、名古屋市博物館本。）

i．百済国ヨリ日羅ト云人来レリ。身ニ光明アリ。太子窃ニ弊タル衣ヲキテ、諸ノ童ニマジリテ、難波ノタチニイタリテミル。

i′．百さいこくより日らといふ人きたれり。太子みそかにわろきゝぬをきて、もろ〳〵のわらはへにましりて難波のたちにいりてみる。（中巻 一 聖徳太子）

ii．コレヨリ後ニ、或人ヒソカニ守屋大連ニ告テ云ク、人々ハカリコトヲナスメリ。兵ヲマウケヨ。ト。

ii′．このゝち、ある人みそかにもりやの大連につけていはく、人〳〵はかりことすめり。つはものまうけよ。と。（中巻 一 聖徳太子）

iii．乞食、「ヒソカニニゲム」ト思キタリ。願主カネテウタガヒテ、人ヲツケテマモラシム。

iii′．乞者、「みそかににけのかれなん」とおもひたるに、願主かねてうたがひて、人をそへてまもらす。（中巻 十一 高橋連東人）

iv．舅ノ僧ノ銭廿貫ヲ借テ任国ニクダル。一年ヲヘテ借銭一倍ニナリヌ。纔ニモトノカズヲ返テ、イマダ利ノ銭ヲツグノハズ。年月ヲヘテナヲハタリコフ。聟ヒソカニタヨリヲハカリテ、舅ヲコロシテムト思テ、

iv′．しうとのそうのせに廿貫をかりてつかひてにむせるくにゝ

「みそかに」は、何故消滅したか

くたりぬ。一年よをへてかれるせ(る)にいちへしぬ。わつかにもとのかすをかへして、いまたりのせにをつくのはす。としつきをへてなほはたりこふ。むこひそかにたよりをはかりて、しうとをころしてむと思て、　（中巻 十五 奈良京僧）

v・栄好ガ童子今日ノ飯ヲウケ置テ、カクシ忍テナクコヱアリ。勤操アヤシビテ、ヒソカニ童子ヲヨビテ、

何事ニヨリテ泣ゾ。

ト、ヘバ、

′v・ゑかうかとうしけふのいひをうけおきて、かくしおきてなくこゑあり。こさうあやしみて、ひそかにわらはをよひて、なにことによりてなくそ。

とゝへは、　（中巻 一八 大安寺栄好）

東寺観智院本のi・は、仮名書きではないが、「ヒソカニ」の例とした。この意は〔内密ニ〕で、名古屋市博物館本′i・に、「みそかに」とある。東寺観智院本のiii・と名古屋市博物館本の′iii・と同じケースである。名古屋市博物館本の′ii・、′iii・の「みそかに」は、〔内密ニ〕の意であるが、東寺観智院本のii・の「ヒソカニ」は、〔小声デ〕と〔内密ニ〕の両意で用いられた例である。名古屋市博物館本の′v・の「ひそかに」は〔小声デ〕の意と解されるので、『土左日記』や『うつほ物語』の1例と同じく、「みそかに」を用いず、「ヒソカニ」を用いたと説明できるが、′iv・の「ひそかに」は〔内密ニ〕の意であるから、不審である。そこで、『三宝絵』の上記の二伝本と、変体漢文で書かれた前田家本を加えた三伝本の成立事情が関わってくるが、それは極めて複雑で、確定的な答えは容易に出せない。私は旧稿[4]で、名古屋市博物館本（東大寺切）が、受け取り手の尊子内親王に献上された原本に最も近いもの、とする説によって、考察を進めた。また、その旧稿では、増成冨久子氏の、東寺観智院本は原本の読み手を離れて、仏教界に身を置く人々及び仏教に深い関心を抱く人々が読み手となっていった、とする説に注目した。増成説は、東寺本の表記体からしても、理解しやすい説であるが、用語の面からしても、物語用語として「みそかに」が選ばれた和文の時代から下って、後の和漢混淆文の用語の「ヒソカニ」が選ばれた時代に東寺本が成立したと考えれば、前掲の例の相違は、ほぼ納得がいく。

名古屋市博物館本の本文は、物語用語の「みそかに」を意図的に用いようとしたものであるが、当時の日常的用語「ヒソカニ」の意識が残っていて、′iv・の「ひそかに」が出たものであろうか。[5]

三、平安末期頃の物語用語の「みそかに」「しのびやかに」と「(うち)しのびて」

『うつほ物語』では、「みそかに」12例、「しのびやかに」7例（但し、既述のごとく、最終巻の「楼の上」に集中）と用いられ、

その後も平安期の最盛時に用いられ続けた両語は、次第に用いられ方に量的な相違が目立つようになる。と同時にその意味分担にも変化が見られるのである。この点を本節では、『狭衣物語』『浜松中納言物語』『夜の寝覚』（以上、「日本古典文学大系」から引例）『とりかへばや物語』（鈴木弘道『とりかへばや物語の研究』から引例）を例に採り、考察する。

1．「みそかに」

「みそかに」は、『狭衣物語』『浜松中納言物語』に各2例、『夜の寝覚』に3例、『とりかへばや物語』に1例と少ない。また、用いられている場面は、かなり限定的である。

1．（乳母・道成）「まことに、思すことならば、しばし、君（飛鳥井女君）にも、しらせたてまつらじ。下り給はん程に、みそかに、（飛鳥井女君ヲ）迎へたてまつり給へ」

（『狭衣』巻一、九三ペ）

2．（狭衣→若宮）「されば、「みそかに、知られで、覗かん」と思ふぞ」との給へば、（若宮→狭衣）「格子も下さでこそありけれ。いざ見せん」と、さゝめき給美しさぞ、世の常ならぬ。

（『狭衣』巻三、三一九ペ）

3．つゆばかりも人に知らせず、親しき人三四人ばかりにて、内裏のほど一日ばかり去りて、さんいふといふ所に、みそかに渡り給ひぬ。

（『浜松中納言』巻一、一七六ペ）

4．ゆゝしきまでうつくしげに大きになり給を、后もみそかに時々見たてまつりて、

（『浜松中納言』巻一、一九二ペ）

1．2．3．では、「知らせず・知られで」などの、語句と近接して用いられている。4．には、そのような語句は見られないが、〔（他人ニ知ラレナイヨウニ）内密ニ〕の意で用いられた例である。

5．（大皇后→帝）「さては、（大皇后→ねざめ）「暮にわたれ」とせちにものし侍らん。ありしやうに、みそかにものせさせ給へ」と、いと御気色よし。

（『夜の寝覚』巻三、二一三ペ）

6．兵衛内侍ばかりにて、（帝ハ）かへらせ給て、いとみそかに夜の大殿にいらせ給ぬれど、つゆまどろまれさせ給はず。

（『夜の寝覚』巻三、二二七ペ）

7．（大貳北の方）「みそかにかう〳〵の事を思したちて、たれにもおどろ〳〵しうは知らせ奉り給はぬとぞ、気色見侍」

（『夜の寝覚』巻五、三三三ペ）

5．は、大皇后が寝覚の上を招いて帝に引き合わせようとする場面で、帝の行為に「みそかに」を冠している。〔内密ニ〕の意を明確にしているのである。6．は、その逢瀬の後、〔（他人ニ知ラレナイヨウニ）内密ニ〕「夜の大殿にいらせ給」うのである。7．には、1．2．3．と同じ意味の語句が、近接して用いられている。

8．（中納言→ある人）「（略）よろしくおぼしめされば、いみじく

「みそかに」は、何故消滅したか

みそかにまゐらん」　（『とりかへばや』上、五四ぺ）

8．は、中納言がある人に、吉野の宮にひそかに会いたい、と伝える言葉。どこまでも秘密に、の意味を込めて、「みそかに」を使ったものであろう。

このように、他人に絶対に知られたくない行為をなす場面で、明確な意味を持つ、この副詞が選ばれたものと考える。

2．「しのびやかに」

「しのびやかに」は、多くの例は、〔声ヲヒソメテ〕〔音ヲカスカニシテ〕の意で用いられている。それは、一、で述べた『うつほ物語』の用例と同じである。ここでは、各作品からその一部を挙げる。

(1)（狭衣ハ）笛をしのびやかに吹き鳴らし給ひて、ほの見給ふ御かたちの夕映、まことに光るやうなるを、
（『狭衣』巻一、三八ぺ）

(2)堀川おもてに、蔀長々として、入り門の心細げに暑げなるなりけり。しのびやかに門をうち叩けば、人出で来て問ふ。
（『狭衣』巻一、六九ぺ）

(3)（狭衣）「蝉紅葉に鳴きて漢宮秋なり」としのびやかに誦し給御声、珍しからん事のやうに、猶身にしみて、
（『狭衣』巻一、七八ぺ）

(4)心憂くて、（狭衣）「南無平等大會法華經」としのびやかにの給へるも、なべてならずきこゆるに、
（『狭衣』巻二、一七四ぺ）

(5)しのびやかに、（中納言→母上）「（略）」とばかりなげき給へるけしき、いと残りおほげなり。
（『浜松中納言』巻二、二四二ぺ）

(6)「（略）」と、しのびやかにの給なるけはひ、あてやかなり。
（『浜松中納言』巻三、三〇二ぺ）

(7)「（略）」とうちなげきたる、すこしおとなび過ぎて、しのびやかにあはれなり。
（『浜松中納言』巻三、三〇二ぺ）

(8)琵琶・箏の琴の人は、物語り忍びやかにしつゝながむめり。
（『夜の寝覚』巻一、五五ぺ）

(9)（宮中将）「（略）」と、気はひも、さまも、人よりはなつかしくなまめきて、いとしのびやかに言ひたるに、
（『夜の寝覚』巻一、八一ぺ）

(10)おしのけらるゝ音、忍びやかに鼻うちかみ、をのづから寝いらぬ気はいの、ほのかにもり聞ゆるを、
（『夜の寝覚』巻一、八六ぺ）

(11)例の御帳のうちに、箏の琴をしのびやかに弾きすまいたまふなり。
（『とりかへばや』上、八ぺ）

(12)さきなどもことゞしうも追はせず、しのびやかにておはしたれば、
（『とりかへばや』上、三三ぺ）

(13)いひやる方なくいみじき御けしきなるに、しのびやかに泣き

たまふけはひなるを、　（『とりかへばや』上、三五ペ）

(14)釣殿に、月はくまなくさし入りたるに、大将は、なよゝかなる御直衣に、唱歌しのびやかに、笛吹きすさびつゝ、待ちきこえたまへるなりけり。　（『とりかへばや』下、一三七ペ）

「しのびやかに」は基本的に、前掲のように聴覚に関わる動作を修飾し〔声ヲヒソメテ〕〔音ヲカスカニシテ〕の意となるが、次の諸例などは、その意から、〔内密ニ〕のような派生的な意に使われている。

(1)（洞院の上）「あな物狂をし。しのびやかにてこそ、出し給はめ。など、かう見苦しう集りたるぞ」　（『狭衣』巻三、二五二ペ）

(2)（洞院の上）「あなかま、たまへ。いかなる事にても、かゝる事はしのびやかにてもてなしてこそあらめ。（略）」　（『狭衣』巻三、二五二ペ）

(3)（一品宮）「いと心もとなげに思ひたるものを。院の御方に、しのびやかにてもありなん」　（『狭衣』巻三、二九〇ペ）

(4)また、わびしきに心もやなぐさむと、しのびやかにわたり給へれば、　（『浜松中納言』巻二、二二七ペ）

(5)そのくれにも、しのびやかに立ち寄り給れど、　（『浜松中納言』巻二、二三六ペ）

(6)いまの乳母、姫君いだき奉りて、御方そひて、たち遅れつゝしのびやかにつゞけたり。　（『夜の寝覚』巻二、一一三八ペ）

(7)（帝→内侍のかみ）「（略）かの人（寝覚上）、むかしより思ふ心ふかゝりしかど、口惜しくてなむ、やみにし。「まかでなむ」とのみなむあめるを、なをしばし慕ひとゞめて、しのびやかに、思ふ事言ひきかすばかり、思しめぐらせ」　（『夜の寝覚』巻四、一二五三ペ）

(8)中納言殿の御乳母の月ごろわづらひけるが、爰にわたりて尼になりにける、とぶらひに、それもけふの、いみじく（中納言八）しのびやかにておはしたり。　（『夜の寝覚』巻一、五二一ペ）

(9)したしう思しめす人二三人ばかり、いとしのびやかに、からかに、はひ渡り給も、　（『夜の寝覚』巻四、一二六六ペ）

(10)人賜一つに、御乳母、したしくさべきかぎり二人ばかり、御前にも、さぶらふかぎりいとしのびやかにて、にはかに嵯峨に参り給ふ。　（『夜の寝覚』巻五、三三二六ペ）

(11)御産屋にこもり給へる、さべきかぎり、うち〳〵にしのびやかにもてないたるばかりぞ、口惜しげなりける。　（『夜の寝覚』巻五、三九五ペ）

(12)権中納言もまゐりたまひて、例の休み所に行きあひて語らふを、しのびやかに、人の返事をぞ書く。　（『とりかへばや』上、一〇六ペ）

(13)ありし人を思ひ出でて、殿上人などしづまりたるに、麗景殿のわたりを、いとしのびやかにたち寄りて、

「みそかに」は、何故消滅したか

（『とりかへばや』上、一〇八ページ）

(14)おほかたにはしのびて、例の中納言の方なる西の対に、しのびやかに入りたまへれば、（『とりかへばや』上、八〇ページ）

(11)では、「うち〳〵にしのびやかに」で、「みそかに」と同義となっている。(14)では、「しのびて」という動作を表す語句と、「しのびやかに」が併用されて、後者は〔内密ニ〕〔秘密ニ〕の意を表している。「みそかに」が、それ自体で〔内密ニ〕〔秘密ニ〕の意を明確に表すのに対し、「しのびやかに（て）」は、文脈から間接的に〔内密ニ〕の意を表す。また、次に述べる通り、「しのびやかなる」「しのびやかなら（む）」等の用法を持ち、物語用語として、「みそかに」を次第に圧倒していく。

3．「しのびやかなる」「しのびやかなら（む）」

i（狭衣ハ）そのわたりをたゝずみ給程に、箏の琴のいたうゆるびたるを盤渉調に調べて、わざとならず、しのびやかなる、絶え〳〵聞ゆ。（『狭衣』巻一、一二六ページ）

右の例は、琴の音の〔カスカナ〕ことを表しているが、次の例ii〜viは〔内々ノ〕〔秘密ノ〕〔人目ニ立タヌ〕の意を表している。

ii あやしながら暮行ほどにまいり給へれば、しのびやかなる方にめしいでゝ、（『浜松中納言』巻五、四一四ページ）

iii さるべくしのびやかなるかぎりさぶらはせ給て、（『夜の寝覚』巻一、七八ページ）

iv いみじううしろめたければ、しのびやかなる方よりまぎれ入給へれば、（『夜の寝覚』巻一、一二六一ページ）

v（中納言）「（略）げにこのほどは、さてぞよく侍らん。たゞしのびやかなるさまにて」と、（『夜の寝覚』巻四、三〇七ページ）

vi 洞院おもてに、右の大臣の君、しのびやかなるさまにて、迎へきこえんとおぼしたり。（『とりかへばや』下、二一八ページ）

vii（中納言ハ）「（略）のどかにありつきなんのちにぞ、みづからばかりに、浅からぬ心のうち見せ知らせて、語らひよりつゝ、しのびやかならん山里に、隠しすへたらん」とおぼしつるに、（『浜松中納言』巻三、二九〇ページ）

右の「しのびやかなら（ん）」は、後続の「隠しすへ」から、〔他人ニ知ラレナイ（ダロウ）〕の意であることが知られる。

4．「しのびて」

「しのびて」には、「うち」が冠せられた「うちしのびて」がある。これは、「しのびやかに」には無い用法であるので、この語に焦点を定めて、「しのびやかに」との相違を見る。

1（乳母→飛鳥井女君）「（略）かしこも、さやうの人、をはし通はむに、いとおかしき所なれば、うちしのびて、二三日も居給ふやうも侍なん。（略）」（『狭衣』巻一、一〇〇ページ）

2 むすめは、（略）まどろまざりつるなごり、寝入りたるところに、大貳うちしのびてきておどろかしつゝ、「この御返事目

とゞめ給ばかり」と教へてかゝす。
（『浜松中納言』巻二、二三六ペ）

3（宮中将→中納言）「（略）さるもとゐさだめて、うちしのびては、海人の子をもたづね侍らん。（略）」
（『夜の寝覚』巻一、六五ペ）

4（内大臣→ねざめ）「（略）あが君、かくな思しそむきそ」と、ひきかへゝ、なぐさめこしらへて、からくして、さすがにうちしのびてあゆみいで給ふ。（『夜の寝覚』巻四、二五八ペ）

5殿はやがてこなたにとまり給ぬるを、宮の御方には、月ごろの定に、うちしのびてだにあらず、かたはらに人なきさまにもてなして、（『夜の寝覚』巻五、三七二ペ）

6なべてのけしきならずと見知らるれば、なさけなからぬほどに語らひて、人々来る音すれば、うちしのびて、たちあかれぬ。（『とりかへばや』上、二九ペ）

「しのびて」の多くは、「しのぶ」〈人目を避けるようにする〉〈他人に見られぬようにする〉〈隠れるようにする〉に「て」の下接した用法で、「みそかに」よりも、動作性を多分に含んでいる。特に、「うちしのびて」は、動作の発生を表す「うち」が冠せられて、〈ソット・サット隠れるようにして〉の意を表す。[6]

四、鎌倉時代の説話文学の「みそかに」「しのびやかに」「しのびて」

ここでは、『古本説話集』『宇治拾遺物語』の二つの作品について、表題の三語の意味差を考察する。（両作品とも「新 日本古典文学大系」から引例。）

1．『古本説話集』の「みそかに」「しのびて」

「みそかに」

1．殿上人四五人ばかり、（略）雲林院に行きて、丑の時許に帰るに、斎院の東の御門の細目に開きたれば、そのころの殿上人・蔵人は、斎院の中もはかゞしく見ず、知らねば、「かゝるついでに院の中みそかに見む」と言ひて入りぬ。
（一 大斎院事 四（）三ペ）

2．夜の更けにたれば、人影もせず、東の塀の戸より入りて、東の対の北面の軒にみそかに居て見れば、御前の前栽、心にまかせて高く生い茂りたり。（同右）

1．2．の引用文はこのまま連続している。そして、この作品では「みそかに」は、この2例である。この2例で「みそかに」が、〈見ルマジキ所ヲ見ル〉〈居ルマジキ所に居ル〉という意味に関して用いられた〔内密ニ〕の意であることが改めて確認される。

ところが、これ以外のところでは、「しのびて」が用いられている。

「しのびて」

1今は昔、人の妻にしのびて通ふ僧ありけり。元の男に見つけられて、詠みかけける、（歌略）といへば、元の男、（歌略）このみそか男は賀朝といひたる学生説教師也。

（一七 賀朝事 四二一ぺ）

2さて、この三人の俗、心を合はせて、このかたちを頭にして、王宮に入りぬ。もろ〳〵の后犯す。后たちは、目に見えぬ物の、しのびて寄り来るよしを、御門に申。

（六三 竜樹菩薩先生以隠蓑笠犯后妃事 四九三ぺ）

1の例などは、後続句に「みそか男」と出てくるので、「しのびて」のところに、「みそかに」が使われても良さそうなものであるが、逆に言えば、「しのびて」が〔内密ニ〕の意を含む文脈（場面）であることは明快であるので、〔隠レテ〕〔人目ヲ避ケテ〕のような動作の意を含む「しのびて」を用いたと説明できよう。

2．『宇治拾遺物語』の「みそかみそかに」「みそかに」と、「ヒソカニ」

「みそかに」は、説話文学の二作品で〔内密ニ〕の意を極めて強く表す語となっていたと思われる。

この作品では、「みそかに」が6例、さらに「みそかみそかに」という用法も表れる。そして1例ではあるが、「ヒソカニ」も用いられる。

「みそかみそかに」

0．（小侍）「（略）あれは七条町に江冠者が家の、おほ東にある鋳物師が妻を、みそか〳〵に入臥し〳〵せし程に、去年の夏、入り臥したりけるに、男の鋳物師、帰りあひたりければ、とる物もとりあへず、逃て、西へ走しが、冠者が家の前程にて、追つめられて、さいづへして、額をうち割られたりしぞかし。冠者も見しは」

（五 随求ダラニ籠額法師事 一五ぺ）

1．家あるじの男、夜ふけて、立聞くに、男女の忍て、物いふけしきしけり。「さればよ、かくし男、来にけり」と思て、みそかに入て、うかゞひみるに、我寝所に男、女と臥たり。

（二九 明衡、欲逢殃事 六四ぺ）

2．我妻の、下なる所に臥して、「我男のけしきのあやしかりつるは。それがみそかに来て、人違へなどするにや」とおぼえける程に、

（同右 六四ぺ）

3．「我身ながらも、かれに、よに恥ぢがましく、ねたくおぼえし」と、平中、みそかに、人としのびて、語りけるとぞ。

（五〇 平貞文、本院侍従等事 一〇六ぺ）

4．其ひかへたる物、「四巻経、書奉らんといふ願をおこせ」

とみそかにいへば、いま門入程に、「此咎は、四巻経書供養してあがはん」といふ願を発しつ。

（一〇二 敏行朝臣事 二〇五ペ）

右の例は、「みそかに言ふ」で、〔秘密ヲ漏ラス〕の意となる。

5．このあづま人、「（略）」とて、此櫃にみそかに入臥して、左右のそばに、この犬どもを取り入れていふやう、

（一一九 吾嬬人止生贄事 二五三ペ）

6．さる程に、この櫃を、刀の先してみそかに穴をあけて、あづま人見ければ、

（同右 二五四ペ）

「ヒソカニ」

●晴明が思やう、「（略）」と心の中に念じて、袖の内にて印を結て、ひそかに咒を唱ふ。（一二六 晴明ヲ心見僧事 二七〇ペ）

この「ヒソカニ」は、〔小声デ〕の意で、前掲の「みそかに」とは全く意味が異なる。

『宇治拾遺物語』の「ヒソカニ」の用法は、一、に採り上げた『うつほ物語』と共通していると言えよう。日常的用語「ヒソカニ」が、物語用語「みそかに」に圧倒されていく時代から、再び「ヒソカニ」が、日常的用語に止まらず、文学用語としても用いられる時代に入ったことを、『宇治拾遺物語』の1例が、示唆しているのである。

おわりに

「みそかに」は、〔内密ニ〕〔秘密ニ〕の意をそれ自体が、明確に表す物語用語として「みそか男」「みそかなり」等から類推的用法として生じた。

一方、「しのびやかに（て）」・「（うち）しのびて」は、本来〔小声デ〕・〔隠レテ〕などの意を表すが、文脈から間接的に〔内密ニ〕の意を表す例もある。その傾向は平安末期の物語ではかなり強くなっている。また、特に「しのびやかに」は、「しのびやかなる」「しのびやかなら（む）」の用法と相俟って、「みそかに」を次第に圧倒していく。

鎌倉時代の説話文学の一部には、「みそかに」が用いられ、平安時代の意味を継承して説話の場面で適切に生かされているが、日常的用語の「ヒソカニ」も「みそかに」の意味差を意識して用いられ始め、平安末期から「しのびやか」「しのびて」に圧倒されていた「みそかに」は衰退から、やがて消滅に向かうのである。

「みそかに」が消滅して、「ヒソカニ」が文学用語ともなった諸作品の、「ヒソカニ」「しのびやかに」「しのびて」の意味差については、後考を期したい。

注

(1) 関一雄「『土左日記』の言葉選び―いわゆる漢文訓読語と和文語の併用について―」(梅光学院大学・女子短期大学部 論集第35号・二〇〇二年)

(2) 「日常的用語」の定義は、関一雄「平安時代の表現語彙と読解語彙―文体史研究のあり方試論―」(梅光学院大学 日本文学研究第38号・二〇〇三年)に記した。

(3) 大槻美智子「「みそかに」「しのびて」「しのびやかに」の語義と文章表現―源氏物語とそれ以前―」(『国語語彙史の研究十九』二〇〇〇年)所収)

(4) 関一雄「『三宝絵詞』の用語と表現」(山口大学文学会志第48巻・一九九七年)

(5) 春日和男氏は、「修正上の手落ちであろうか。」とする。(『説話の語文』・一一二頁)

(6) 関一雄『平安時代和文語の研究』(一九九三年)の第六章 接頭語「うち」の意味。